

Imparfait hypocoristiqueについての時称的・人称的考察

横 井 雅 明

0. はじめに

本稿で扱うのは、*imparfait hypocoristique*と呼ばれている、(1)～(3)のようなフランス語の半過去の用法である。

(1) Ah! qu'il *était* joli joli, mon petit Maurice! (Wagner, R.L., cité par Wilmet (1976) p.88.)

(2) Qu'il *dormait* bien ce bébé dans sa voiture! (Wilmet (1976) p.84.)

(3) Là, là qu'il *était* sage! (*ibid.*)

この半過去の用法の特異性は、1. 現在の事実を半過去で述べている、2. 発話者の眼前にいる、通常2人称で語りかける発話相手に3人称で語りかけている、という2点である。すなわち、(1)は母親が赤ちゃんを抱きながら言っているせりふであり、(2)は乳母がくすぐりながら子どもを目覚めさせようとしている時のせりふであり、(3)は子どもが泣き出した時に、話し手がなだめる時のせりふである。

Sato (1990)によると、この半過去の用法には次のような特徴が見られる。

(4)

1° Les sujets parlants sont à de rares exceptions près les femmes (surtout les mères).

2° L'interlocuteur est le plus souvent un jeune enfant ou un animal familier, exceptionnellement un adulte (mais en présence d'un enfant).

3° Il arrive presque toujours la transposition de personne (la troisième remplaçant la deuxième).

4° Il exprime toujours, dit-on, une intention du locuteur de caresser, de flatter l'enfant ou l'animal visé. D'où la qualification « hypocoristique ».¹⁾

本稿では、*imparfait hypocoristique*の用法において、現在の事実を現在形ではなく半過去形で述べるのはなぜか、そして、多くの場合に2人称から3人称への移行が生じるのはなぜか、について考察する。

1) Sato (1990) p.103.

1.

Imparfait hypocoristiqueについての先行研究は、多くはない。大部分の文法書では、半過去の例外的用法として、その存在を記すのみである。以下、先行研究をいくつか見ていく。

1.1. Damourette et Pichon (1911-1936)

Damourette et Pichonは、次のような口頭による採集例をいくつか紹介している。

(5) Il *faisait* de grosses misères à sa maman, le vilain garçon.

(6) Il *faisait* chaud, Coco, près du feu.

(5)は、子どもに向けられた発話、(6)は飼い犬に向けられた発話である。このような半過去の用法について、Damourette et Pichonは、次のように説明する。すなわち、これらの文は、「話し手が実際に浸っている現実を表現しているのではなく、話しかけられている子どもや動物を中心とした事実世界を表現している」のであり、話し手は「発話している現在性 [actualité] に不完全にしか入っていない」のである²⁾。

1.2. Wilmet (1976)

Wilmetは、Damourette et Pichonによって例示されたimparfait hypocoristiqueのいくつかの例文を列挙し、先行研究をいくつか紹介した後、次のように結論づけている。すなわち、imparfait hypocoristiqueは、「一種のimparfait « de théâtre » に帰着する」もので、「大人は、子どもに話しかけると同時に、舞台の袖 [cantonade] で話している」のである³⁾。そして、Gougenheimのせりふを引用し、「人は、発している言葉を重大に考えたがっちはおらず、結局、その言葉を聞いている、または聞くことのできる大人に向けて言っているのである⁴⁾」と説明する。

1.3. Ichikawa (2001)

Ichikawa (2001)は、imparfait hypocoristiqueの例文を、1. 2人称主語から3人称主語への移行を伴わないもの、2. 2人称主語から3人称主語への移行を伴うもの、3. imparfait hypocoristiqueの例文か、通常の半過去の例文か見分けがつきにくいもの、の3種に分類しているが、2人称から3人称への移行が起こるメカニズムについては何も触れていない。

半過去の使用については、まず、次のようなmoi-ici-maintenantへのdcalageを伴う用法を指摘する。

(7) S'il *faisait* beau aujourd'hui, je me promènerais. (irrel)

(8) Je *voulais* vous dire quelque chose. (cf. Je voudrais ...) (attnuatif)

(9) Toi, tu *tais* Indien, moi, j'*tais* cowboy. (l'imparfait prludique)

2) Damourette et Pichon (1911-1936) Tome V, p.242.

3) Wilmet (1976) p.104.

4) *Ibid.*

そして、次のような imparfait forain の例とともに、以下のように主張する。

(10) Qu'est-ce qu'elle *voulait*, la dame?

すなわち、半過去には moi-ici-maintenant とは別の軸を構築するという、より抽象的な機能があるのであり、法的なさまざまな用法は、半過去を過去の時制とみなす考え方、すなわち、moi-ici-maintenant から過去の方に時間的に移行するという考え方からは説明が困難であると、主張している⁵⁾。

1.4. Ichikawa (1999)

さらに先行する Ichikawa (1999) では、imparfait hypocoristique における 3 人称の使用を次のように説明する。Ichikawa は l'idée du contentement de soi-même du locuteur⁶⁾ を提案し、「話し手はこの半過去の文を、話している対象物に対する感動で一杯になりながら、発話するのみである⁷⁾」と言う。そして「この発話は真の意味でのコミュニケーションではなく、話し手自身のために言われるもの」であり、話し手の視点は、半過去の他の用法における場合と同様に、発話行為の空間の中にあるので、3 人称が « interlocuteur » として使われることができる、と主張する⁸⁾。

2.

Imparfait hypocoristique の用法は、Ichikawa (2001) においても述べられているように、法的な用法 (上記例文(7)参照)、緩和表現の用法 (例文(8)参照)、préludique な用法 (例文(9)参照)、imparfait forain (例文(10)参照) とともに、過去の事行を表さない用法である。他方、半過去の一般的な用法は、Ichikawa (2001) が挙げている以下の例のように、明らかに過去の事行を表す。

(11) En 1989, j'étais à Paris.

(12) Quand j'étais enfant, j'allais à la pêche tous les dimanches.

(13) Je *lisais* le journal quand elle est entrée dans le salon.⁹⁾

そこで、フランス語時称体系の中での半過去の位置付けが問題となる。

半過去は複合過去とともに「不完了-完了」というアスペクト的対立を呈するために、この両時称形を同じ軸上に配し、同次元で扱う考え方もあるが、半過去と現在形の用法の類似性から、現在を中心とする時称の下位体系と半過去を中心とする時称の下位体系の2つを区別す

5) Ichikawa (2001) pp.89-90.

6) Ichikawa (1999) p.2.

7) "... il (= le locuteur) se contente d'énoncer des phrases à cet imparfait en étant plein d'attendrissement pour l'objet don't il parle." (*ibid.*)

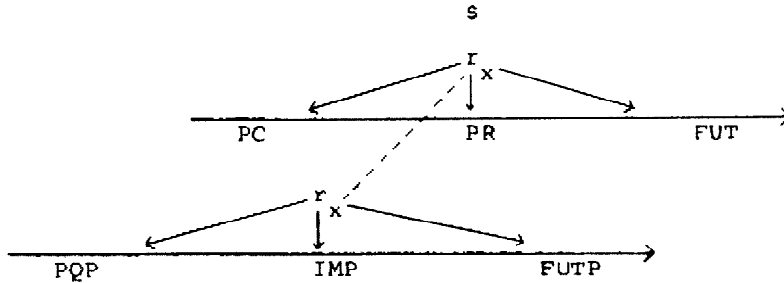
8) *Ibid.*, p.3.

9) 例文(11)~(13) : Ichikawa (2001) p.85.

る考え方もある。

Vet (1980)では次のようなフランス語時称体系の図式が見られる¹⁰⁾。

(14)

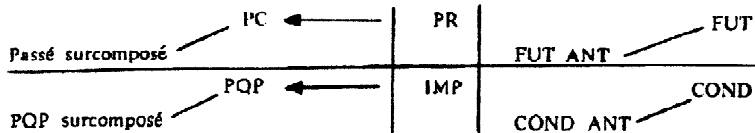


ここで、 r_x は発話時点(s)から直接的に位置付けられる基準点である。Vetは、現在(PR)と半過去(IMP)のみが、それを中心に、先行[antériorité]を示す時称と後続[postériorité]を示す時称を形成することができることから、フランス語の時称体系は2つの下位体系から構成されていると言う。現在を中心とする下位体系は、複合過去(PC) (先行)と単純未来(FUT) (後続)を含み、半過去を中心とする下位体系は、大過去(PQP) (先行)と条件法現在(FUTP) (後続)を含む。前者は発話時点(s)と一致する基準点 r_x を中心に位置付けられ、後者はsよりも先行する基準点 (同様に r_x と表記されている) を中心に位置付けられる。

このVetの考え方では、半過去と複合過去は、同じ時間における出来事を表現することができるけれども、両者は異なる次元に属していることになる。

さらに先行する、Martin (1971)においては、次のようなフランス語時称体系の図式が見られる¹¹⁾。

(15)



ここでは、現在(PR)を中心とする時称下位体系と半過去(IMP)を中心とする時称下位体系が、完全に並行の関係として捉えられていて、通常認識される現在と半過去の時間的差異は表現されていない。

VetとMartinに共通していることは、現在と半過去を、多くの文法学者が行っているように、「一本の」時間軸上には位置付けていないということである。ここから導き出されることは、半過去によって表現される事行は、時間的に過去のことを表現することができるが、それは、発話時点(s)から直接的に過去に遡る、というかたちで表現しているのではない、ということである。結果的に、過去のことを表現するとは言っても、より重要なことは、それは次元の異なる

10) Vet (1980) p.32.

11) Martin (1971) p.155.

軸上に位置付けられた事行なのである、ということになる。

この「次元が異なる」ということが、何を意味するかと言えば、それは空間的隔たり、次元の間の隔たりである。これを distance とする。例文(11)～(13)のような用法において、distance は、もっぱら時間的次元のものとなる。それに対し、例文(7)のような非－現実の事行を表す半過去では、「現実」と「非現実」の間のdistanceとなり、例文(8)のような緩和表現においては、「普通の言い方、普通の接し方」と、「丁寧な表現、相手に対する敬意」の間のdistanceとなる。さらに、例文(9)のような imparfait préludique の表現では、「現実世界」と「仮想世界」の間の distance となり、例文(10)のような imparfait forain の例では、「お客さんが入ってきた過去の時」と「実際に応対できる現在」の間の distance となる。

Imparfait hypocoristique も、この次元の隔たり、distance によって、説明が可能であるように思われる。すなわち、「子ども（あるいは愛玩動物）の世界」と「大人の世界」の distance である。話し手は、大人に向けて話す際のような直接的な表現ではなく、子どもの世界との距離を意識して、少し隔たりをおいた感じで子どもに話しかけているのである。Imparfait hypocoristique は Ichikawa が主張するような、話し手自身のための発話ではなく、明らかに子ども（あるいは動物）への話しかけであると思われる。

以上のように、フランス語時称体系を2つの下位体系に分類して、発話時点(s)を中心とする世界と、半過去によって表現される事行との間に「次元的隔たり [distance]」があると仮定すれば、半過去の様々な用法を統一的に説明できると思われる。

3.

本節では、imparfait hypocoristique において、2人称から3人称への移行が多く起こる現象について考察する。

まず、この移行は義務的ではない。事実、人称の移行を伴わない例文が、数は少ないが見られる。

(16) Bonjour mon mignon. Que tu *étais* mignon! (Wilmet (1976), p.84)

(17) Comme tu *pleurais* fort! Comme il *était* triste! (*ibid.*, p.85)

例文(16)では、話し相手である子どもを *tu* という2人称で指示しながら、半過去を用いている。例文(17)は初めに *tu* を用いた後、すぐ次の発話で3人称(*il*)に移行しているまれなケースである。しかしながら、imparfait hypocoristique のほとんどのケースにおいては、2人称から3人称への移行が起きている。

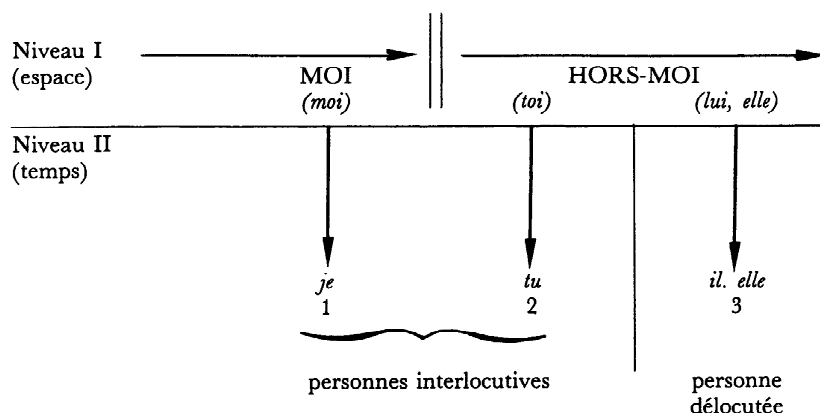
Benveniste も述べているように、*je* および *tu* と、3人称は、その機能においても性質においても全く異なるものである¹²⁾。このことを、Joly (1973)の説明から見ていく。

Jolyは、まず Gustave Guillaume の講演内容から次のような代名詞の図式を提示する¹³⁾。

12) Benveniste (1966) p.256.

13) Joly (1973) p.63.

(18)



人称の体系はまず、*moi* と *hors-moi* を分ける第1の操作 [opération] から生じる。すなわち、*moi* と、空間的に *moi* でない全てのものとが区別される。これが Niveau Iである。そして、Niveau IIで第2の区別が生じる。すなわち、*moi* は、*hors-moi* の一部を時間的次元に含んでいて、そこから *tu* が生じる。そして、*moi* が排除する *hors-moi* の部分が *il, elle* である¹⁴⁾。

そこから、次の3つのケースが生じる。

(19)

- 1) 分類の最大のケース [cas extrême de séparation] : 話し手、つまり話している人と、その人によって話されている対象 (1人称)
- 2) 中間のケース [cas moyen] : 話し相手、つまり話されている相手と、その人に話すことによって話されている対象 (2人称)
- 3) 分類の最小のケース [cas de séparation minimale] : 話しに加わっていない人、つまり話しても話しかけられてもいず、単に話題になっている人 (3人称)¹⁵⁾

Niveau IIにおいては、*je* と *tu* には *rapport allocutif* ou *rapport d'interlocution* [対話関係] が存在する。これは Benveniste の « corrélation de subjectivité » に相当すると言う。そして、この関係は、同一の時間空間 (話し手の発話の瞬間) にある2人の対話者を想定する。つまり、*rapport allocutif* ou *rapport d'interlocution* には、話し手である1人称の時間空間に、話し相手である2人称が入り込むということを意味している。他方、3人称は、この関係から、空間的にも時間的にも排除されている。それは、*personne absente* である、と言う¹⁶⁾。

そこから、次の図式が生み出される¹⁷⁾。

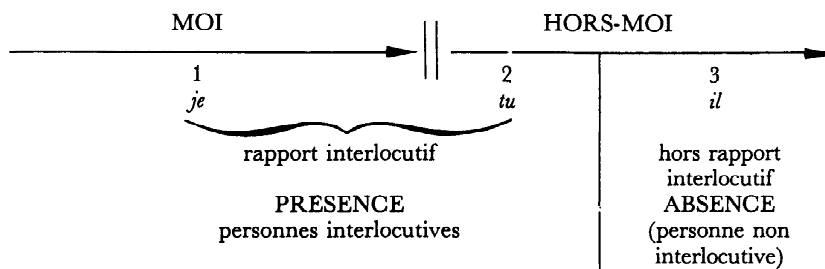
14) *Ibid.*

15) *Ibid.*, pp.63-64.

16) *Ibid.*, pp.65-66.

17) *Ibid.*, p.66.

(20)



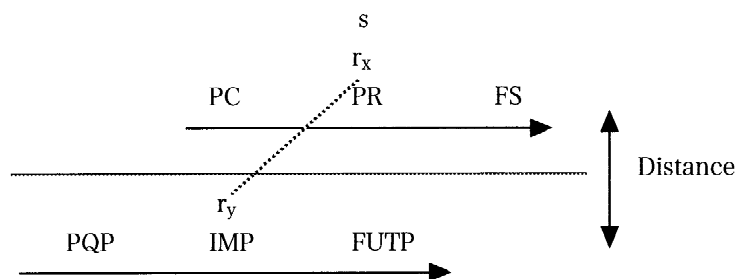
すなわち、*je* と *tu* は、rapport interlocutif によってその存在が必要とされる、「対話人称 [personnes interlocutives]」である。他方、*il* を代表とする 3 人称は rapport interlocutif の外に存在する、あるいは rapport interlocutif の欠如を示す人称であり、「非-対話人称 [personne non interlocutive]」である。

4.

第 3 節の代名詞の分析から、1 人称および 2 人称と 3 人称の間には、大きな隔たりがあることがわかる。すなわち、moi-ici-maintenant を中心とした世界において、対話が構築されるために必要な *je* locuteur と *tu* allocutaire は rapport interlocutif という緊密な関係を保っている。そこから 3 人称へ移行するには、その間に次元の違い ((20) では縦の線で表記されている)、つまり隔たりが存在することになる。これを第 2 節で定義づけた distance という用語で呼ぶとすれば、imparfait hypocoristique における 2 人称から 3 人称への移行も説明ができる。すなわち、大人の世界と隔たりを持つ子どもの世界への発話というケースにおいて、直接的な話し相手を示す人称である 2 人称を用いることを避けて、間接的な指示対象である 3 人称を用いるのである。

第 2 節の時称解釈は、次のように図示することができる。

(21)

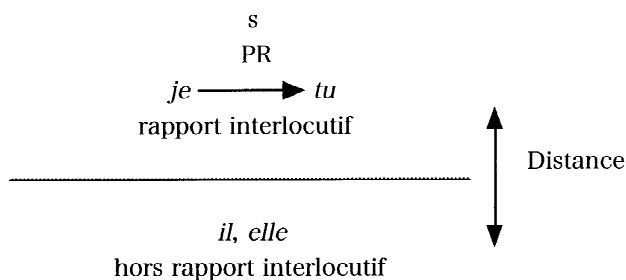


発話時点(s)と同時の r_x という基準点を中心として、その同時(PR)、先行(PC)、後続(FS)の 3 つの時称は、s と「直接的に」位置付けられている。これらは同じ次元に配置されるものであり、緊密な関係を保っている。他方、 r_x とは異なる別の次元に設置される r_y という基準点に対しても同様に、その同時(IMP)、先行(PQP)、後続(FUTP)が配置されるが、これらの時称形は s と直接的に位置付けられることはできない。そこには次元の違い、隔たりがあり、すなわ

ちdistanceがある。Imparfait hypocoristiqueにおいて、眼前の出来事を現在形ではなく、半過去で表現するのは、このdistanceをおくことによって、表現力(=「かわいい」,「いとoshii」などの感情)を増大させる働きがもたらされるからであると考えることができる。

また、人称の体系は次のように図示することができる。

(22)



発話時点(s)において構築される *je* と *tu* の rapport interlocutif は、*je* と *tu* を緊密な関係で結び、s を中心とする 1 つの世界(次元)を構築する。他方で、rapport interlocutif の外にある *il, elle* は *je* と *tu* の世界(次元)とは異なる次元に位置付けられる。この 2 つの次元の間の隔たり、distance が、やはり同様に、「かわいい」とか「いとoshii」という表現力を増大させる。

半過去と 3 人称の使用を伴う、imparfait hypocoristique は、表現力が二重に強調されていることを表すのである。

例文(16)では、半過去を用いながらも、代名詞は *tu* であり続けるので、表現力の強調の度合いが、やや低くなっていると考えられる。例文(17)は、初めに *tu* と半過去で話しかけた発話が、相手(=子ども)に対する親愛の感情が途中でさらに高まり、3 人称と半過去の使用という、強調の第二段階に移行したと解釈できる。

4. おわりに

Imparfait hypocoristique における時称的・人称的違和感は、時には人に誤った語法であると感じさせるほどである。しかしながら、フランス語の時称体系、人称体系について、次元の違い、さらにその次元の間の distance という概念を導入することによって、特殊に見えるこの用法も、言語使用上の統一的操作によってなされているという説明が可能であると思われる。

(2011年3月29日受理)

参考文献

- Benveniste, Émile (1966) : "La Nature des pronoms," in *Problèmes de linguistique générale, 1*, Gallimard.
- Damourette, Jacques et Édouard Pichon (1911-1936) : *Des Mots à la pensée - Essai de grammaire de la langue française, Tome V*, D'Artrey.
- Ichikawa, Masaki (1999) : "Sur l'imparfait dit hypocoristique," 『熊本大学文学部論叢, 63 (文学篇)』, pp.1-3.
- _____ (2001) : "Ah! qu'il était joli joli, mon petit Maurice! : De l'imparfait hypocoristique à la fonction essentielle du tiroir," 『熊本大学文学部論叢, 71 (文学篇)』, pp.83-91.
- Joly, André (1973) : "Sur le système de la personne," in *Essais de systématique énonciative*, P.U. de Lille (1987), pp.59-97.
- Martin, Robert (1971) : *Temps et aspect*, Klincksieck.
- Sato, Fusakichi (1990) : "Sur l'imparfait « hypocoristique »,," 『フランス語動詞論』, pp.103-123.
- Sten, Holger (1952) : *Les Temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.
- Vet, Co (1980) : *Temps, aspects et adverbes de temps en français contemporain - Essai de sémantique formelle*, Droz.
- Wagner, Robert-Léon et Jacqueline Pinchon (1962) : *Grammaire du français — Classique et moderne*, Hachette.
- Wilmet, Marc (1976) : *Études de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.